ひととおり、スーザンさんによる説明が終わったあと、質問をさせていただきました。

Q　何歳から何歳までの生徒を引き受けるのですか。

A　13歳から18歳の生徒を引き受けます。また、原則として男子校で全寮制です。

Q　入学するのには、どのような手続きが必要ですか。

A　13歳で入学試験相当の試験を行います。ただし、現在は申し込んでから10年位は待たないと入学できないので、ハーロースクール出身の親などは、男の子が生まれるとすぐ入学の申込みを行う場合が多いようです。

Q　年間の学費はいくら位かかりますか。

A　約13，000ポンド（約200万円～250万円）ですね。

Q　外国人も入学できますか。

A　原則として、母国語が英語であれば、入学できます。ただし、現在、日本人も2人います。

ハーロースクールでは、現在、あまり使われていない古い教室しか見学できませんでしたが、11の寄宿舎があり、ラグビー・サッカー等の競技場、体育館、屋内プール等の施設が整備され、勉強にスポーツに、また、地域ボランティア等に活動しているそうです。

なお、イギリスの学校の多くは、日本と同じように無料で教育を受けられる公立校であり、ハーロースクールは、むしろ特殊な学校に属するということです。しかし、日本と大きく違う点は、個人の自由を重んじるイギリスでは、学校はあっても入学させるか否かは各家庭の判断であり、子どもが学校へ行くのは義務ではないということです。例えば、教育機関が非常に充実しているロンドンでも文盲がかなりいるという話に、登校拒否等について質問しようと思っていた参加者一同、大変驚いていました。

▲ハーロースクールでの研修

次に、フランスの農業事情は…

11月5日、一行はロンドンを後にして英仏海峡トンネルを結ぶ鉄道・ユーロスターに乗車して一路、パリへ向かいました。

まず、フランスときくと華やかなパリのイメージが目に浮かびますが、実は、国土（約55万㎢、日本の約1.5倍）の80％以上を占める平野のうち、その60％以上が農地であるEU随一の農業国であるということです。しかし、農業就業者は、近年著しく減少し、現在は、フランスの人口約5，800万人のうち、農業就業人口は100万人を割っています。

今回は、このうちパリから西南に約200㎞離れたロワール川沿いのぶどう栽培・ワイン製造農家を訪れました。

ロワール川流域は、温暖な気候と肥沃な土地に恵まれ、フランスの庭と呼ばれ、王侯貴族たちがこぞって建てた80以上の古城が有名です。

ロワール地方の農家は、一軒で10～20*ha*耕作している農家が多いということです。今回訪れた、クリスチャン・マルタンさんは、5*ha*のぶどう畑を栽培しているそうです。

はじめに、バスで小高い丘陵地にあるぶどう畑を見学したあと、ワイン蔵に案内され、ワイン造りの方法等の説明を聴きました。

『ぶどうの樽はふつう樫の木で作りますが、この地域では、栗の木製のものも多く使います。また、良質のワインを作るために、昼と夜の2回手で圧搾しています。

この酒蔵は、700年前に掘られた地下の酒蔵（CAVE）で、古いものになると4世紀頃のものもあります。

中世の頃、僧侶は自給自足でしたので、ぶどうの栽培をしていました。そのあとを地元の農家が引き継ぎ、現在に至っているのです。』

質問のうち、主なものをひろってみますと……

Q　ぶどうの種類としては、何種類位ありますか。

A　白ワイン用の苗は1種類しかありません。苗の種類を混ぜないことが、いいワイン作りに必要だからです。

ただし、赤ワイン用は3種類位の苗があります。

Q　ぶどう栽培とワイン作りは、マルタンさん一人でやっているのですか。

A　労働者を一人雇っています。

Q　（ワインの試飲をさせてもらって）同じ白ワインでも甘さが非常に違うのはどうしてですか。

A　どの果物でも、天候が良ければ甘くなるためで、1990年は天候が大変良くぶどうのできが良かったため、甘い良質のワインができたからです。

概ね、以上が公式訪問地で受けた説明の概要ですが、限られた時間帯で通訳を交えての研修は、実質的には予定の半分の時間しか取れないため、もっと詳しい説明を聴き、理解を深めたい点もありましたが、時間が足りなくて残念でした。

しかし、ハーロー・スクールのスーザンさん並びにぶどう栽培農家のマルタンさんの熱心な説明を受け、大変有意義な研修ができました。深く感謝申し上げます。

▲フランスワイン農家にて

ロンドンの教育にふれて

視察団団長
岡村三男

去る11月2日から8日にかけて、ロンドン、パリを中心とした海外研修に参加させて頂きました。ロンドンでは、学校を見学しながら教育について、パリでは、郊外の農家を訪れブドウ栽培・ワイン作りについて、それぞれ研修をしてきました。

職業柄、やはりロンドンの教育について高い関心がありましたが、生活習慣、社会制度の違いなどに驚かされることがたくさんありました。例えば、交通規則。日本では信号が赤であれば、歩行者は横断歩道を渡れませんが、ロンドンでは安全確認さえしっかりすれば渡ってもよいのです。逆に、信号が青だからといって安心して渡れるわけではありません。もし、事故にあった場合は信号が赤のときはもちろん、青であっても歩行者の不注意ということになってしまいます。日本では歩行者優先がロンドンでは車優先となります。

また、「ゆりかごから墓場まで」という言葉に代表されるように、社会制度が整っており、生活が保障されています。教育はもちろん、医療なども無料になっています。子供の出産費から、年老いて死んだときの葬儀代まで公費で賄われます。そんなことから、貯金をしたり、生命保険をかけたりするということがありません。給料は週給制で金曜日にもらってそのお金で週末を楽しむという生活です。日本でいう失業手当にあたるものが、未就労者に支給されますが、ガイドさんの体験からその金額は下手な仕事の賃金よりも多いそうです。

ロンドン郊外の道路をバスで走っていると、俗に「二軒長屋」と呼ばれる家並が続いていました。一戸の家がちょうど真ん中を中心に左右対称に作られていて、二家族が住めるようになっています。庭もついていますが、全体としてはこじんまりとした建物で、みんな同じ様な造りになっています。イギリスでは、一生で平均5回家を移り住むそうです。子供は21歳の誕生日を迎えた次の日から独立し、別居します。そして結婚し、子供ができ、その子供が独立し、最後には夫婦二人になる。その時々の家族構成、勤務先などの条件によってアパートを借りたり、家を買ったりして転居生活を続ける。老後は夫婦二人でのんびり生活できるような自然に恵まれた郊外に移り住むという。日本では子供が親の面倒をみることになるが、イギリスでは子供の世話になることを嫌い、またそうならなくてすむように福祉制度も完備している。

こんなふうに、日本とは生活習慣や社会制度にかなり大きな違いがみられます。仕事にあくせくするわけでもなく、土地や家などの財産に固執する感じもなく、質素な中にも安心して生活でき、一生をとても身軽に楽しく過ごせるような印象を強く受けました。

教育については、これもまたかなり日本とは違っていました。公教育では、大学まで無償だそうです。また、日本では保護者に教育を受けさせる義務がありますが、イギリスでは地方公共団体にあるということです。つまり、家の事情で学校にいけない子供がいたり、いかないという子供もいることになります。実際、義務教育の就学率は60％で、40％は学校に行っていません。社会全体が4つの階級に分かれていて、学校教育を受けなくてもそれなりの仕事に就け、それなりの生活が送れるようです。

私たちが訪問した「HARROW SCHOOL」という学校は私立で、レベルが高く上流階級の生徒が学んでいる学校です。この学校はハーローの丘の上にあり、1615年にこの地方の自作農家だったジョン・ライオンの遺産によって建てられました。現在では世界中の国から集まった13歳から18歳の男子生徒が800名、11の寄宿舎に生活して、日曜日を除く毎日の午前中と週3日の夕刻に授業を受け、午後はスポーツや郊外活動に励んでいます。ここでは、生徒が卒業の際、自分の名前を壁に彫るという伝統があり、その中には、戦時中の首相として英国の栄光を築き上げたウィンストン・チャーチル卿をはじめ7名の首相の名前がみられる名門校でもある。学費は年間、1万3千ポンドと高額にもかかわらず、上流階級にとっては人気があるという。

ただ、名門校であるには間違いないのですが、そこを出たからといって、よい大学に入れるとか、よい会社に就職できるというわけではない。イギリスには二種類の国家試験があり、一つは11歳以上になって受けられるO（オーディナル）レベルの試験。二つ目は15歳以上になって受けられるA（アドバンス）レベルの試験。これらの試験でいくつの資格（単位）を取っているかが、大学入学や会社の採用基準になっています。したがって、学校教育はこの国家試験に合格するためにあると言えそうです。

教育制度についても、公立・私立を含め、かなり日本とは違いが大きく、学歴社会の日本で、学校教育の抱える問題は山積していますが、イギリスの教育制度は今後の学校教育を考えるときに、とても参考になりそうに思えます。今回の研修旅行に参加させてもらいとても有意義でした。そして、多少のハプニングはありましたが皆さん無事に帰ってこれたことが、団長としてなによりでした。

今号から、参加されたみなさんの研修感想を順次掲載します。